

監修

佐佐木信綱
辻善之助
山田孝雄
和田哲郎
新村出
津田左右吉

菟玖波集
下

福井久藏校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「菟玖波集」下 福井久藏校註

昭和二十六年一月三十日初版發行

昭和三十年九月十五日第三版發行

印刷所 精興社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 三〇〇圓

目次

本文

卷第十一	一
戀連歌下	三
卷第十二	三
雜連歌一	三
卷第十三	七
雜連歌二	七
卷第十四	一〇
雜連歌三	一〇
卷第十五	一四
雜連歌四	一四
卷第十六	一五

目次

二

雜連歌五

一五九

卷第十七

一八三

羈旅連歌

一八三

卷第十八

二二九

賀連歌

二二九

卷第十九

二四六

雜體連歌

二四六

俳諧(二四六)……聯句連歌(二六四)……雜句(二九一)……片句連歌(二九六)

卷第二十

二九六

發句(二九六)

菟玖波集
下

福井久藏

菟玖波集卷第十一

戀連歌下

(一)露の枕は新古今集の俊成卿の女の歌「あだに散る露の枕に臥しわびて鶉鳴くなり床の山風」によつてゐる。涙にぬれた枕を指す。枕をおきては置くに起くをいひかけてある。前句は、涙をそいだ枕をはなれて曉の鐘聲を聞くの意で、孤閑をまもる悲しみを示す句。

(二)盡きない離別の情になほまたの逢ふ瀬を契るであらうと添へた。逢ひながら別れを惜しんで歎いた意を附けてゐる。

(三)名・逸本「後を」

(四)學本「契りけん」

(五)互ひに手をさしかへ、愛人のためにわが手枕をゆるしたのはほんのただ一度で實にはかないことよ。

(六)それきり再會出来ないわかれのままにと附けた。

(七)胸中の悶悶の情を察してくれとの前句は、相手が執念深くて志を遂げない意にも取れる。

露のまくらをおきて聞く鐘

名残ある別れに後やちぎるらん

左近中將義詮

我が手枕の夢は一たび

又も見ぬ人の別れのそのままだに

源氏頼

なほかきくらす心知れかし

(一)土本「別れぬる」○附句は、わかれ
てのちの心情にとりなして、頼みもなく
に泣くをかけてある。

(二)重なる恨みを述べた前句に對して、
心急ぐな、夜の明けないあひだは語らう
ではないかと附けて、深夜の意にとりな
した。よもあけじの「よも」は上の夜を
受け、まさかの意を兼ねさせた。

(三)圖・高・小・家本「よもあらじ」

(四)それかこれかと種種に心の迷ふせる
で、聲を立てて泣いてゐるだらうとの意。

(五)名・京・伊本「ねやなかるらん」

(六)附句は「ねをなく」を鶏の鳴くにと
り、曉鶏のこととし、そのとりをさらに
取りあへずのとり意に轉じ、わかれが
辛いのに曉鶏に催され、慌しくわかれて
哭(ね)に泣くと連結した。

(七)最後のおしつめた心を人が告げるら
しいとの前句に對し、離情切切、再會の
測り知られないのを歎いた意に附けた。
(八)親しかつた契りが全く裏切られ、恰
も赤の他人のやうになつた。

(九)前句を破れた戀と見ないで、早曉に
わかれてからまだ程も経ないのに夕方の
逢ふ瀬が持ち兼ねると附け換へた。

別れなん後は頼みもなく涙
性遵法師

ふかき恨ぞうき愁なる

待てしばし鳥なかぬ夜はよも明けじ救濟法師

心まよひにねをやなくらん

曉のとりあへずうき別れして常曉法師

人や限りのころつぐらん

またいつと知らぬ別れに夜は明けて源頼基

かはる契のほどをこそ知れ

別れてやまた夕暮の待たるらん尊阿法師

(一〇) 名・小・逸本「けふはほどなし」○
はかない逢ふ瀬を夢と見て眼前にちらつ
く人の面影は、夢のあとの互ひの間を結
ぶ契りのやうだとの前句を説明するため
に、註釋附を加へた。

(一一) 前句は疑ふ戀、後句は一度逢つて再
會の期し難い戀。

(一二) 狩場の野では生き物が殺されるので
うらめしいとの釋教の前句を、狩にはむ
かしは鷹を使用したのでこれを出し、一
旦放した鷹は招くと、またもとの手に歸
つて來るやうに調養してあつても、時に
ははづれて山野に飛び去り、再び歸つて
來ないことがある。それに托して、一旦
契つた仲が他にはづれて空しくなつた恨
みの戀を述べた。放鷹の盛んな鎌倉時代
の作として時世の匂ひが存する。

(一三) 夏には拘んで飲んだ泉のほとりも今
日は通り過ぎればといひさした旅の前句
で、普通ならばその當時の追憶などを豫
想させるが、紀貫之の「拘ぶ手の雫に濁
る山の井のあかでも人に別れぬるかな」
の歌を踏まへて、水むすぶとあるのに關
伽をもつてし、それに飽かにいひかけ、
飽かぬ別れを忍ぶと戀の意につけた。

九二
倂は夢より後のちぎりにて
けふいつとなくまた別れぬる
ト部兼前

九三
うたがひながら待つ契かな
逢ふことも後をば知らぬ別れにて善阿法師

九四
狩場の小野のうらめしきかな
はし鷹のそれし空しき別れより
隆祐朝臣

九五
水むすぶあたりもけふは過ぎぬれば
あかぬ別れをしのぶばかりぞ
京月法師

(一)前句は毎曉袖を絞るといふを身を絞ると強調していふ。曉に鳥は附合。曉鶏の聲を恨むのは若い相思の情であるが、ここは夜明けを告げる鳥の聲も男女相逢ふ夜分のものとして、夜の間の楽しさに引きかへ朝には歎くとした。

(二)名本「うきに」

(三)名・逸本「なほ曉の」○曉に起き出でて行手の道を急いでゐるらしいとの旅の句に見える前句。

(四)名本「いそぐらん」

(五)附句は、通ひ來て睦びかはしてゐても、人目をはばかり曉起きをし、いそいそと道を急ぎ行くと戀の句とした。

(六)父母も内内許しか、通ひ來る路に關守も置かず、邪魔なものはないと戀の喜びを歌つた前句に、それでも曉の鶏聲はわかれを促すので、そればかりは恨みだとの附合。

(七)山路を行くと、ほのかに聞える村里の鶏聲が旅情を慰めてくれるので、鶏聲が友であるといった旅の句。

(八)明け方に共寢の人にわかれると、あまりの悲しさに自分は床にひとり泣いてゐると戀の句に取りなした。

曉ごとに身をしばりつつ

鳥のねはあふよのうちになしはてて前大納言爲氏

曉おきの道いそぐらし

逢ひみても人目を思ふ歸るさに後二條院御製

我が通ひ路の關守はなし

よなよなの恨は鳥の聲ばかり後嵯峨院兵衛内侍

ゆふつけ鳥の聲ぞ友なる

別れ路のあけゆく床にわれなきて福光園院入道前關白左大臣

契ぞいまは秋になりぬる

(九)約束したその月日もすでに過ぎて物思はせる秋となつた。

(一〇)大江千里の歌のやうに月見れば千千に物こそ悲しい習ひであるのに、天心にかかつてゐる月に對して、なぜそれを人の形見に思ふかとみづから怪しむさま。述懐の戀の句。

(一一)後醍醐天皇の年號。

(一二)前句は、月も紅葉も擧げてないが、惜秋の句。

(一三)附句は、後朝のわかれを歎く以上に今晩は苦しいとした。戀の心が稀薄。

(一四)前句の鳥の聲は朝とも夕ともことわつてない。一向氣にもとめないとの意。

(一五)附句は兼ねて曉起きの苦しい體驗があるが、たれがこの曉の鶏の聲に後朝の歎きをするぞと、重く取りなした附味。

(一六)前句にははやすでに曉の鐘が鳴るかと驚きの意が含まれてゐる。

(一七)附句は入相の鐘ならば相逢ふべきにと後朝の歎きを述べてある。「ましかば」の下に「嬉しからまし」の句を補つて見る格。

三〇 何ゆゑに月をかたみと思ふらん 後醍醐院御製

嘉暦四年内裏七夕に

三一 ときぬぎぬの別れもかくや歎きこし 前太政大臣

三二 それとは知らず鳴く鳥の聲 左近中將義詮

女のもとにて曉の鐘の聞えければ、

三三 曉のかねの聲こそ聞ゆなれ 小一條院

と侍るに

三四 これを入相と思はましかば よみ人知らず

- (一)名・逸・甫一・小本「倂のこせ」
 (二)圖・北・大・家本「かはる夜に」學
 ・名・高・小本「かはる世に」○かはる
 世にとすると述懐の意となる。
 (三)これが最後のわかれとなるのに、人
 はまことにつれなくて、物悲しい秋さな
 がらの状態である。
 (四)秋に月を配し、有明けの月下に悲し
 い別れを餘儀なくされてと附けてある。
 (五)眞夜なかに見るのは曉まで残る下弦
 の月であるとの前句。
 (六)仲間にはぐれた一羽のやもめ鳥が月
 下に淋しさうに鳴いて哀れを添へてゐる
 と附けた。
 (七)前句は一面の銀世界のなかにも夜の
 間に人の通つた足跡は印されてゐるとの
 雪景の句。
 (八)京・伊本「今朝の白露」
 (九)附句は、夜更けて名残りを惜しみつ
 つ歸つて行つた戀人の足跡だと戀の句に
 附けなした。
 (一〇)學・高本「夜深にいつる別れにて」
 (一一)一たび覺めてまた寝についた枕の濡
 れてゐるのは夜寒の露か、わが涙のため
 か。わが涙であることを一層はつきりと

元亨元年十月、龜山殿百韻連歌に

倂のこす有明の月

いたづらに人はつれなくかはるよに 後宇多院御製

これや限りの人は秋なる

うき別れあり明の月にとめかねて 關白左大臣

夜中にみるは有明の月

別れよりやもめ鳥のねに鳴いて 權律師定暹

跡こそこの今朝の白雪

なほうきは夜ふかかりつる別れにて 藤原資顯

浮き出すために、愛人は去り、月影は西へかくれて、夜はまだ明けきらない時と附けた。

(二)人は往つて、自分の手枕には涙ばかりが残つてゐる。

(三)去つた人の面影は、無心に空に輝いてゐる。月を見ると、忘れることの出来ないその夜もすでに明けて、いまは涕を忍ぶよすがもない。

(四)守藤は伊勢神宮の禰宜。

(五)祕してゐたことが世間に洩れて浮き名の立つのは苦しい。

(六)わかれをあまり惜しむために夜が明けて人目につくと附けた。「忍ぶに」を甫一本の「慕ふに」とすると、旅のわかれの意が濃厚となる。

(七)幾筋となく頬を傳つて流れる涙の数は、それを受けた袖の上に残つてゐる。

(八)たのむの雁は田面の雁の意であることを頼む意を兼ねさせた表現。雁は蘇武の故事による書信の意に使つてゐる。懐しい書信があるかと頼りにしてゐるのに、そのつてがなく涙を流すとつづけた。もし見でを打ち消しとしないと、便りはあるが來ないのでの意になる。

また寝のまくら露か涙か

二 月もいり人も別れて残るよに

周防法師

二 涙ばかりの残る手枕

二 涕を月に忘れぬ夜は明けて

一四 荒木田守藤

一五 もれぬべきこそ憂き名なりけれ

一六 別れ路をあまり忍ぶに夜はあけて賢阿法師

一七 涙の数も袖にこそあれ

一八 玉章をたのむの雁のつてに見で 三善仲久

(一) 圖・名・甫・神・京・北・石・逸本
「まことなりけり」

(二) これもそのまま形見だといふ述懐の句である。拒絶された文を身につけて、せめての慰めとしてゐる。はかなき戀。

(三) 名・小・甫一本「圓惠」

(四) 腹立たしさを述べてある前句に、手紙にはくはしく書いても、逢うて語るほど十分に意をつくせないのが遺憾であると辯護した。

(五) 名・逸・甫一本「千句の」

(六) 返した人の面影が眼前にちらついて忘れられぬとの前句を、紙の裏まで書きつめてた状をくり返し讀んでゐると、その懇切が身に沁みての意とした。

(七) 圖・名・北・石本「家平」

(八) 前句は見て増す戀を述べ、附句は種類の書狀をくりひろげて見る意とした。

(九) 大空をわたる雁は、よく秋といふ季節を知つてゐて、時を違へずこの國を訪れる。

(一〇) 名・小・逸本「雁も」

(一一) 親切な玉章はちよつとした便りにも

九三 これもさながらかたみなりけり^一
かへさるる我が玉章を身にそへて 權大僧正圓忠^三

九三 見るにつけても恨こそあれ
玉章^四に心はつきぬならひにて 左兵衛督直義

九三 關白家の千句連歌に^五
かへして見ればあとの倂
玉章^六をうらせばきまで書きなして 藤原家尹朝臣^七

九三 變ひしさや見るたびごとにまさるらん^八
とりあつめたる人のたまづさ 木鐔法師

送られるかと待つてゐるのに、月日は
やく過ぎて、すでに秋は來たと書信のか
き絶えた戀を歎く。

(二)名・甫一本「忠度」

(三)一列になつて飛んで來る雁のむれも
引きつづき見えてゐたが、このころは間
遠になつて物淋しいとの秋の句。

(四)附句は、身にはなにもおもしろくも
ない秋がやつて來て、雁は人の玉章を足
にかけて來るといふが、それもかき絶え
てと文の絶えた戀。

(五)前句は、山里の雪景を詠じたもの。
むかし在原業平は正月大雪の朝、小野の
里に隱栖されてゐる惟喬親王をおたづね
して「わすれては夢かとぞおもふ思ひき
や雪ふみわけて君を見んとは」と眞心を
披瀝した話は伊勢物語にあるが、附句は
これを背景としてゐる。あれほどに約し
て置きながら、雪に妨げられて來ないの
は、文に偽りがまじつてゐたかと戀の句
に轉換。

(六)深き色には紅が附く。紅の筆のすさ
びと金葉集に詠んであつて、男女贈答の
艶書をいふ。筆のまにまに書いた艶書に
眞の心底を知りたいとした。

九美

雲井の雁の秋をしるなり
玉章は風のたよりに待たれしに

丹波忠峯朝臣

九三

まとはになりぬ雁の一行
身の秋にその玉章もかき絶えて

二品法親王

九三

雪かき分けて訪ふ人もなし
いつはりや文の詞にまじるらん

前大僧正賢俊

九三

深き心の色を知らばや
くれなるの筆のすさびの言の葉に
前中納言有光

忍ばずよよその誰にも見せてまし

(一) 隠さずにたれにも見せてやりたいとの前句に戀の文をと附けて、腹いせのため暴露的にあらはした。

九四〇 こひしとかける人の玉章 素遲法師

(二) 春雁北地へ去る春景の句に、書信は互ひにかはしながらと附けて、親しく住みつかぬ由を寓した戀の句となした。

九四二 又立ちかへる春のかりがね 玉づさはこなたかなたに通ひつつ寂忍法師

(三) 水くきのあとは筆跡をいふ。戀の文がほごになつて契りを遂げなかつた由につづけた。

九四三 契りしはいつはりにのみ成りはてて あれどかひなき水莖のあと 圓嘉法師

(四) 偽書の戀。

九四四 引きかへしてもなほうかりけり 一筆のいつはりげなる玉章に 藤原助廣

(五) 文に書き盡くさない戀にかきなしてゐる。

九四四 いはぬ心の奥ぞ残れる 玉章を急ぐ使に書きさして 左近少將善成